「修士論文執筆を振り返って」

社会福祉学専攻　小笠原　秀一（平成 28 年度修了）

１．最初の問いかけ

最初は誰もがそうであるように「何から手をつけたらよいか」という真っ白な状態でしたが、まず私がやったことはガイドブックの「ガイド」を徹底して読むことでした。田中先生や阿部裕二先生のご指導を何度も読み返し、「学問とは学んで問うこと」の意味を自分なりに解釈し、自分の問いは何なのかそれをノートに図示してみました。そして、ガイドブックに書かれていたことから特に重要だと感じたことは、一つは先人への敬意の表出であり、もう一つはオリジナリティをいかに出せるかの二点でした。私の問い（テーマ）は既に多くの先行研究があり、それらを謙虚に学び理解したうえで、いかに自分の問いを関心レベルから研究レベルの問いへと発展させることができるか、しかも自分なりの独自性が出せるか、この二つがポイントになると感じたのがスタートとなりました。

こうして、自分の姿勢（スタンス）をできるだけ明確にイメージしておけば、論文執筆中もただ漠然と書き連ねるのではなく、オリジナリティはどこにあるのか常に自問自答しチェックしながら進めることができると思います。

２．資料収集の方法

これについても基本的なことはガイドブックで丁寧に解説しています。ネットによる論文検索、図書館利用、学会誌や専門誌の活用など利用するにあたっての注意事項が細かくアドバイスされています。このほかに、私がよく利用したのは新聞のスクラップです。論文のキーワードがテーマとなっている記事を切り抜いて持ち歩き、朝の始業前や昼休み時間の細切れ時間によく目を通していました。新聞によって異なる論調や立場が違えば結論が違うことなどがよく比較できて、最新理論の把握や自説の形成に非常に役に立ちました。

次に利用したのは、地域においての社会福祉実践活動の情報です。幸いにも同期生に社協の方がおられたので実際の活動内容を教えてもらったり資料をいただいたりしたおかげで、文献を読んだだけではわからない現実を知ることができ、理論と実践の対比に大いに参考となりました。

また、地域では震災後復興の地域コミュニティ再生のためのトークショーやセミナー、パネルディスカッションなどのイベントが活発に開催されていましたので、会場に足を運んで聴講することで様々な発見や気づきがありました。これらは論文の結論形成に影響を与えることになりました。

仕事をかかえながら論文作成することは確かに大変なことではありますが、日々の仕事や生活と社会福祉学は密接に関係しており、両者を分けて接するのではなく「論文のネタになるのでは」と常にアンテナを伸ばして仕事に臨む姿勢が良いと思います。

３．指導教員からのアドバイス

スクリーングで特に印象に残っているのは「世の中には不思議なことがたくさんあるのだからテーマは何でもよい。結論は明らかになったことだけを書けばよい」と先生から指導を受け、それまでの迷いが消えて肩の力が抜けたことです。また、別のスクーリングでは「ずっと考えられるテーマにしよう、自画自賛がベスト」とアドバイスを受けたことです。自分が最も知りたいことが何であるかを知ること、「なぜだろう」と問い続けることが、論文執筆という長旅を続けるモチベーションとなります。

最後に、2 年間は短いようで長く、せっかくの休日にも机にかじりついてた私を温かく見守り応援してくれた妻には心から感謝しています。3 年前、長男の入学式で萩野前学長の「福祉とは幸福への限りない追求である」というお言葉に感動し、自ら門をたたいた私の即断は間違っていなかったと、今は達成感と満足感に浸っています。